

# 3 ラナンキュラスの安定生産と産地の発展に向けて

## ■ 東讃管内ラナンキュラス生産者 ■

(東讃農業改良普及センター 井口 里香、○藤原 亜紀)

### ●対象の概要

香川県におけるラナンキュラスの切花栽培は、昭和 50 年代に管内のさぬき市（旧大川郡長尾町、寒川町）から始まった。平成 18 年には、ウイルス病の蔓延などで栽培面積が 0.5ha まで減少したが、農業試験場による茎頂培養技術の開発や県オリジナル品種「てまりシリーズ」の育成などにより、県内全域に生産が拡大していった。管内でも、平成 26 年から高松市の香川県農協中央地区ストック部会が新規品目としてラナンキュラスの導入・出荷に取り組んでいる。

現在、管内では、古くからの産地であるさぬき市と新しい産地である高松市の2つの地域を中心に、16戸（JA共選出荷：四国大川ラナンキュラス研究会5戸・中央地区ストック部会6戸、個選出荷：5戸）が計0.9haの施設栽培を行っている。

### ●課題を取り上げた理由

さぬき市と高松市の両産地では、それぞれ異なる課題を抱えている。

旧来の産地であるさぬき市では、近年、立枯性病害による株の枯死や採花時における原因不明の花シミが課題となっており、高齢化による生産量の減少に拍車をかけている。

新しい産地である高松市でも、同様に立枯性病害や花シミが課題となるのに加え、生産者が増加する中で、品質の高位平準化に向けて新規栽培者の早期の技術習得が求められている。

また、JA共選出荷を行っている四国大川ラナンキュラス研究会と中央地区ストック部会では、担当する営農センターが異なることもあり、これまで交流の機会が少なく、生産者からは交流を深めて産地の発展に繋がりたいという声上がるようになった。

これらの課題を解決するため、立枯性病害や花シミ対策、新規栽培者の支援、産地間交流の促進に関係機関と連携して取り組んだ。

### ●普及活動の経過

#### 1 立枯性病害の防除対策

病虫害防除所と連携してこれまで取り組んだ結果、立枯症状には根腐病菌と株枯病菌の2種類の菌が関与しており、定植1週間後頃から萎凋するのが根腐病、定植40～50日後頃から萎凋するのが株枯病であることが明らかになった。

そこで、有効な防除方法について検討するため、病虫害防除所と連携しながら、薬剤処理や土壌還元消毒の効果について、実証ほを設けて調査した。



根腐病発生株

#### 2 花シミ対策

病虫害防除所と連携してこれまで取り組んだ結果、花シミについては、ハウス内の過湿が大きな要因となり、濡れた花卉に灰色かび病菌が付着することにより、発生することが分かった。

そこで、湿度が急上昇する早朝を中心にハウスの換気を徹底するよう呼びかけるとともに、過湿を防ぐハウス資材として除湿性のあるPVAフィルムの使用による抑制効果を確認するため、実証ほを設けて調整した。

#### 3 新規栽培者の支援

ラナンキュラスを生産する上での重要な技術の一つが、塊根の冷蔵処理である。そこで新規栽培者が失敗することがないように部会員共同での冷蔵処理作業を実施した。

また、全県的に開催する新規栽培者用の講習会や合同巡回、農業試験場などへの視察を行い、栽培について情報共有できる機会を設けた。

#### 4 産地間交流の促進

今年度初めてとなる四国大川ラナンキュラス研究会と中央地区ストック部会での合同巡回を実施し、交流の促進と情報交換の機会を設けた。

### ●普及活動の成果

#### 1 立枯性病害の防除対策

防除所での試験と実証までの調査結果から、薬剤処理については、冷蔵前の塊根消毒と定植後の薬剤灌注・散布によって株枯れ症状の発生を防ぐことができた。懸念していた薬害についても、実証までの発生はなかった。

また、土壌還元消毒についても、慣行の太陽熱消毒と比較して、立枯性症状（根腐病）を防ぐ一定の効果が認められた。さらに、菌核病の予防や除草にも効果があり、定植後の生育も良好になることから、水の確保や還元臭（ドブ臭）が問題とならないほ場では、生産者への普及が期待できた。

#### 2 花シミ対策

PVAフィルムによる抑制効果を確認するため実証した結果、花シミの発生は、対照区（ビニール）と同等で、効果は認められなかった。しかし、ハウス内湿度は対照区よりも低く、結露による花卉への水滴の落下が軽減されたほか、燃油量の削減効果も期待できた。

#### 3 新規栽培者の支援

新規栽培者向け講習会や、定期的な巡回指導により、今年の暖冬下でベテラン生産者が苦戦する中、新規栽培者のほ場では、概ね安定的な栽培が行われた。

また、1月に行われた新規栽培者の合同巡回および農業試験場の視察では、試験場の研究員や専門技術指導員から、試験場での試験内容や今後の栽培管理について意見交換や情報共有することができた。

#### 4 産地間交流の促進

合同巡回によって、病虫害防除や花シミ対策への栽培管理など、産地間の情報交換が行われた。

また、産地間で異なる出荷方式についても話題に上り、四国大川ラナンキュラス研究会が、28年1月から横箱・乾式を立箱・湿式に切り替えた際、湿式資材に中央地区で使用している湿式輸送パックを採用することになった。

また、縦箱になったことにより、他の産地より

も固めだった切り前が改善され、さらに、花を包んでいたセロファンも、穴あきフィルムに変更することで、作業の効率化や花卉の花シミ発生防止が期待できた。



産地間の合同巡回



縦箱・湿式への転換

### ●今後の普及活動の課題

#### 1 高品質安定生産を目指して

立枯性病害の対策については、有効な薬剤処理や土壌消毒の方法の普及に取り組むが、品種や展着剤の種類によっては薬害が発生する可能性があるため、注意しながら指導する必要がある。

花シミ対策については、防除方法が確立できていないが、引き続き湿度を上げない管理の徹底を呼びかけるとともに、花シミの一因である灰色カビ病対策として、ローテーション防除について検討する。

#### 2 規模拡大・産地の発展を目指して

今後も経験年数の浅い栽培者については、重点指導し、栽培技術の向上と規模拡大に繋げるとともに、産地間の情報交換や活性化に向けて交流を促進し、管内全体の産地の発展を図っていく。